

第二章 田山花袋における三人称文体の獲得

——江見水蔭「十人斬」と田山花袋『重右衛門の最後』——

田山花袋は、一八九三「明治二六」年八月下旬、長野県上水内郡三水村赤塩に友人を訪ね、滞在中、藤田重右衛門の溺死を目撃している。九月一日の「信濃毎日新聞」は、その死を次のように報じた。

○溺死 上水内郡三水村大字赤塩の藤田重左衛門⁴三十年十月は一昨々日飲酒酩酊の末全村渡邊平之丞所有の蓮池に陥り溺死したりと

後年、花袋はそのことを次のように回想している。

『重右衛門の最後』は明治廿七年の夏に自分の目撃した事実である。其時、これを江見水蔭君に話した。好材料だと言った。そして水蔭君は私の話から思ひ付いて『十人斬』といふ小説を書いた。私はそれでは満足が出来なかつた。其事件には『十人斬』に書いた以上にある生々しい意味がある。何故にそれがさう明かに自分の心に印象されたかといふ理由が其時分の頭脳では解らなかつた。で、幾度か書かうと思つて、筆を取つて見ては捨てゝ了つた。鞆丸の大きいといふことが何故悲劇の本になつたか、祖父に甘やかしてそだてられたことが何故あゝした生涯を送るやうになつたか、さういふことが解らなかつたので、何だか馬鹿馬鹿しいやうなつまらないやうな、小説などにすべきものでないやうな気がした。それだけ自分の頭脳は美とか理想とかいふものに支配されて居た。處が理想を破壊し、美を破壊し、大きな自然にそのまま触れると、一番先に其の『重右衛門の最後』の活事実が活きて浮んで来た。其理由が分明と頭脳に映つて来た。で、『重右衛門の最後』の一編が成り上つた。

（田山花袋『小説作法』一九〇九「明治四二」年七月、博文館）

『重右衛門の最後』（一九〇二「明治三五」年五月、新声社）を論じるときに必ず参照されてきた文献であるにもかかわらず、ここで回想されている江見水蔭「十人斬」（『春夏秋冬』一八九四「明治二七」年九月、博文館）について、従来論じられることがなかつたのはどうしてだろう。詳細を極めた小林一郎『田山花袋研究——博文館時代（二）——』（一九七八年三月、桜楓社）でさえ、この文献を引用する際、傍線部を「中略」してしまつていることが、こうした研究史の実態を象徴的に物語っている。このことは、『重右衛門の最後』が「十人斬」をプレテクストとしつつ、またそれを乗り越えるべくして成立したという、自作についての花袋の自己評価を、研究史が暗黙のうちに了解してきたということにほかならない。

さて、花袋の回想によれば、この小説の題材は、「明治廿七年の夏」（正確にはその前年、彼自身が「目撃した事実」だった。それを、当時硯友社内でもっとも親しく交わっていた江見水蔭に話したところ、興味を持った水蔭が、翌年に「十人斬」という作品にした。ただし、花袋はそれに「満足が出来なかつた」。この不満が、八年後の一九〇二「明治三五」年に『重右衛門の最後』を書かせることになった。

〔2〕
岩永胖は、周到な現地調査によって『重右衛門の最後』の虚構性を明らかにしているが、むしろここにはふたつの《事実》があったと考えるべきだろう。つまり、『重右衛門の最後』が田山花袋の《事実》認識に基づいて、それを再現すべく構築された物語だとしたら、江見水蔭「十人斬」もまた、同様の意識によって物語られたものである、つまり《事実》の再現を指向して書かれた物語であるという点において両者に差はないということだ。いや、岩永が現地で収集したという《事実》もまた、回想や噂や口碑からなる「物語」に過ぎないから、正確には三つの《事実》が存在しているというべきかもしれない。

フィールド・ワーカー

物語の構成面において、ふたつのテクストの類似性は明瞭である。まず、都会からの訪問者がテクストに内在しているということ。さらに、そのフィールドワークの場所がどれも山間の小村であること。また、そこで社会性のきわめて希薄で野性的な「自然児」に出会い、その出会いについての報告が物語の主軸をなしているということも一致している。また、その「自然児」が村人への怨恨から放火を働くことも同様である。両者の相違点を探すのも難しくない。「十人斬」で、主人公である野生児「平助」をその結末へ向かわせたのは、村人への怨恨・復讐という使い古された物語内論理でしかなかった。それに対し、『重右衛門の最後』は、重右衛門の村人への私怨という主題のほかに、大宰丸という生理的条件と「祖父に甘やかされて育ったこと」という生活環境上の要因をも視野に入れながら、また、「十人斬」には出てこない野性的な「少女」を導入することで、いわば複眼的に事件の因果関係を構築しようとしている。このことから、水蔭の構築する復讐譚という話型の「古さ」を見出し、それこそが花袋の不满の原因だったと結論づけてしまうのも可能かもしれないが、ここでの目的は不満の原因探しなどではない。探訪者の、現地での物語の採集とその報告の仕方の相違、そして、それによつて現れてくる《事実》の質の違いを、同時代の《事実》をめぐる諸言説との関連のもとに俯瞰することこそが目的である。

一 新聞報道における《事実》

江見水蔭は『自己中心明治文壇史』（一九二七「昭和」二年一〇月、博文館）において、「十人斬」を次のように回想している。

其他に『春夏秋冬』の原稿として「十人斬」を書いた。その頃騒がれた河内の十人斬、その殺伐な名で読者を引付けて置いて、其実文学的作品で驚かさうといふ小細工なのであつた。（此時代には、斯うした事も必要な程、一般読者の程度は低くかつた。）

水蔭は、現実起こった事件、すなわち《実話》との相対的な距離において《事実らしさ》を構築しようとしたという。ならば、「十人斬」における《事実らしさ》は《実話》との比較の上で測定することが可能だろう。では、「その頃騒がれた河内の十人斬」とはいったいどんな事件だったのか。^{編注}

一八九三「明治」二六年六月二七日、「大阪毎日新聞」に「富田林の十人殺し」という記事が掲載された。「一昨夜の十二時ごろ河内国石川郡水分村の松永源次郎方へ火を放ちて家族十人を殺害したる者ありとの事ゆゑ取敢ず社員を派出したれば帰社の上掲載すべし」。たったこれだけであるが、この小さな記事を皮切りに、この後、「大阪毎日新聞」は、六月一日までほぼ連日のように「十人殺し」についての続報を掲載してゆく。つまり、水蔭のいう「その頃騒がれた河内の十人斬」とは、この新聞報道を始めとする同時代のさまざまな言説の集積にほかならない。ちなみに、「大阪毎日新聞」の記事にしたがつてこの事件のあらましをまとめると、次のようになる。

- (1) 明治二六年五月二六日夜一一時過ぎ、
- (2) 大阪府下 河内国石川郡赤坂村大字水分で、松永伝次郎をはじめ十人が無惨にも殺された。
- (3) 犯人は金銭と女性の問題で被害者らを恨んでいた城戸熊太郎と、その子分である谷弥五郎。
- (4) 犯行後、この二人は金剛葛城山中を神出鬼没、縦横無尽に逃げ回り、警察・地元を挙げての搜索は十数日に及んだが捕まる気配はなかった。
- (5) 結局、二人は六月八日になって、自らの咽喉を鉄砲で撃ち抜いた自殺体で見つかった。

さて、これらの「事実」が、江見水蔭を始め同時代の人々に、いかに理解されていたのかを、やはり「大阪毎日新聞」の実際の記事に見てみたい。いうまでもなく、新聞の報道とは事実そのままではなく、あくまでひとつの物語化された現実にはすぎない。ただし、読む者たちは、まさにその、物語としての記事によって、世界に起こっている「現実」を把握するわけで、その意味で、新聞の報道のありかたを見ることで、同時代読者たちがこの「河内の十人斬」という事件をどのように捉えていたのか、その一般的な認識のありかたが推定できるはずである。

報道四日目、五月三十一日の記事を検討してみよう。この日の報道は、何よりもまず、この事件から得られる教訓が提示されるところから始まる。「恋の遺恨と喰物の遺恨ほど世に怖いものなしと有来りの洒落にいへるが真に然り」。そしてこれに続いて「実に恐るべきの限りならずや」という、記者の善悪の価値判断が表明される。つまり、この新聞記事は、すでに起こった事件の結果（十人もの斬殺）と、それについての評価が定まったうえで、その凶悪な事件を引き起こすに至る来歴が追及される、というスタイルに支えられている。それは、この記事の小見出しが「◎熊太郎が日頃の行状」「◎加害の原因」「◎加害者当日の模様」「◎人殺しの弥次馬弥五郎の目的」という立てかたになっていることからもおおよそ推し量ることができるだろう。このうち「◎加害の原因」を引用する（記事には、句読点を適宜補い、会話文には鉤括弧を付した。以下の新聞記事引用についても同じ）。

◎ 加害の原因 或は其筋に就き或は隣家のものに就きいろく問試みたれども確たる事は判然せず。間男のことは扱置、松永熊次郎に金を貸し云々の事も元賭博の上の貸借にて、それは三月前、仲裁する人ありて悉皆片が附しといへば、何か他に原因のあることなるべし、左もなければ相手は兎も角何も知らぬ当歳の赤子まで大根斬にする訳はなかるべしと村人も云合へり。其の証拠には現に間男と目指せる当人松永虎吉が先頃より宇治へ出稼ぎに行き留守なりしといへり。斯程までに決心したものが肝腎の当人が居るか居ないかを知らぬ筈はあるまじ、間男をした女房より其の相手なる間男其のものゝ憎いのは普通の人情であるべきに、其の当人が留守を見込で活劇を演じたなどは余程可笑い事ならずや、茲を以て見るも何か外に込入た事のあるは必定ならん。

これらの記事の関心が、逐次挿入される「いったいどうしてこのような惨事が起こったのだろう」という、常に因果関係を問おうとする問題意識によつて構築されていることに注目しよう。「何か外に込入た事のあるは必定ならん」という物言いは、一見素朴な疑問の提示に見えるが、「外に込入た事」がない可能性を排除し、より「込入た」方向に読者の関心を誘う。つまり、この原因究明の報道は、すでに記者が想定している物語が確固たるものとしてあり、あくまでその期待された物語に沿うものになることを義務づけられているのだ。

したがって、さまざまな情報は、この期待された物語に収斂する形で動員されることになるだろう。次はその典型例で、ここでは、犯人たちの人となりが記されているのだが、その文体は、記者には知りえないはず（この時点で、事件はまだ解決していないし、犯人はのちに自殺体で発見されるから）の熊太郎・弥五郎の会話や心中思惟の引用をもふんだんに用いた、極めて物語的なものとなっている。

◎ 人殺の弥次馬弥次郎の目的 弥次馬も随分あれど此の位の弥次馬は神武以来稀なるべし、然しながら能く問訊せば全くの弥次馬にてなきものゝ如し、元来弥五郎は同村なる浅井伝三郎の娘おてるといふに疾から交情し添ふ添はれぬの極り文句より一時道行筋と出掛しが遂に引戻され、おてるは親元に引取られしより「嫁にくれる」と掛合しが（中略）嫁は遣りたくなし、止を得ず近村の或る口利を頼み強て承知させしより、弥五郎は確と怒り、人もあらうに近村の者を頼んだは小面憎し、己を威勢づくめに凹ませる気だらうヨシヨシ何時かは眼に物見せてくれんと思ふ矢先に、博賭仲間の熊太郎が酒の上、酔興のあまり「己は嫁と虎吉を殺して遣」と口走りしに、「ウム貴様もか己も是々の事がある」と同気相通じて遂に事の茲に及びしならん（以下略）

こうした報道スタイルには常に危険が伴っていた。というのは、まだこの時点で、犯人の熊太郎と弥五郎の行方が分かっているからである。もし、このあと二人が生きたまま捕縛されたら、事情聴取の内容をもとに新聞報道が捻出した会話や心中思惟の虚構性があらわになってしまう。その意味でこれらの新聞報道にとって幸いだったのは、このあと、犯人の熊太郎と弥五郎が自殺したことだった。

ただし、もし犯人が生きたまま捕まったとしても、この新聞報道には逃げ道がしっかりと残されていた。

前々号より引続いて加害者城戸熊太郎、弥次馬谷弥五郎の兩人が血の雨を降らせし大活劇を演ずる、そのここにいたれる原因、目的、日頃の行状、当日の模様（中略）等、本社が得意の機敏なる運動にて他社の真似しうべからざる詳細の事実を報道せしが、更に今また確実にてしかも新奇の事実を探り得たれば、左に掲ぐべし。

新聞報道の最大の特徴は、その速報性にあった。「事実」は日毎に書き継がれ、更新され、〈事実の訂正〉もその速報性ゆえに「更に今また確実にてしかも新奇の事実を探り得たれば」という断り書きを挿むことで不問に付されるのだった。そして「事実」は、このような「事実の断片」の集積という方法で形作られてゆく。ここまでの考察の結果をまとめておこう。「河内の十人斬」をめぐる新聞記事の特徴とは、(1)十人の斬殺という結末を見据えたうえで、この残酷な結末を必然とするような「過去」が、噂・証言・推測・断定などあらゆる情報を総動員しつつ編成される。(2)噂・証言・推測・断言など、諸言説の間の信憑性の位相の違いはいたん等閑に付され、取捨選択され、しかるのちにもっともらしく地均しされた「ひとつの物語」が作られる。(3)もし過言があつたとしても、新たな〈事実〉の提示によって訂正が可能である——という三点に集約されるだろう。

二 「十人斬」における〈事実〉

江見水蔭を含む、同時代の人々の「河内の十人斬」についての理解が、新聞記事に見られたような枠組みによって形成されていたのだとしたら、水蔭が「十人斬」というテキストで打ち立てようとしていた〈事実〉らし

さ」は、それとはまったく対照的な方法によるものであった。それは、事件の当事者、すなわち犯人自身に事件に至るまでの経緯を語らせる、という方法である。

「十人斬」は、山中の小村の真つ暗な細道を、泥酔した主人公・平助が「独言」をつぶやきながら歩いてゐる場面からはじまる。彼は、借金・放火など日頃の悪行ゆえに村八分にあい、その鬱憤が「独言」となつて表れ出ているのだ。このとき背後から見知らぬ人物（この男が、新聞報道における探訪者に相当する）が現れ、平助に声をかける。暗闇から突如現れ出た男に、平助が不信感を抱いたのは当然である。平助は何度も素性を明かすように求めるが、この男も「いやお前には私が名乗つても分るまいよ。私を唯旅の者と思ふて居ればそれで好いのさ」などとしか答えない。そればかりか「何んと構はずにお前の腹の中をさらけ出して、言ふて聴かしては呉れないか」、「決して怪しまずに、なんと話しては呉れまいか」などといつて平助の境遇を聞かせると懇願しさえするのである。そして、しばしのやりとりのうちに、平助の側も、今日に至るおのれの歴史を話す方向に次第に気持ちが傾いてゆく。

「嗚呼、なんてい今日は不思議な日だらふ。何処でも吞ませぬ酒を珍らしく御所村で振舞はれて、此通りぐでんぐでんに酔ッぱらツちまつて、ぶらくと斯うやつて帰にかけて居る途中で、我の心中を聞いて呉れる人があらうとは……村中では誰一人我の合手に成つて、我の言ふ事を聴いて呉れる者がないのに、林藏奴でさへ我を蒔いて先きへ行つちまつて、仕方がねえから独言を言つて居たのに、お向ふ様から聴かして呉れるとハ、酔つて世界が逆様に見えたのは、万事が転覆ツた證據であツたか。旅の衆、歩きながら話しやせう、聴いて被下い、斯うだ」

新聞報道において、殺人の原因や犯人の日頃のふるまいは、凶悪で卑劣な殺人という結末を想定したうえで、その残虐さに見合うよう創造されていた。一方、「十人斬」において十人の斬殺はテキストの最後に位置づけられ、その代わりに、この斬殺に至るまでの艱難辛苦が、平助自身によつて物語られる。テキストは二人の会話を軸に展開し、のちに十人もの斬殺をすることになる平助の、告白・自己言及こそがこの小説の主軸を構築していく。つまりここには、新聞報道にはなかつた、ほかならぬ本人が告白することによつて保証される「事実らしさ」、という方法が看取できる。いうまでもなく、自分のことを、真面目に、他人に向かって、語りだすまでの困難が大きいほど「事実らしさ」は増すわけであつて、平助の告白に至るまでのくだかしい導入部分は、この告白の信憑性を構築するための重要な役割を担っているといえる。

ここで重要なのは、平助の自分についての物語には、聴き手としての「旅の者」の働きかけや相槌が不可欠である、という点である。つまり、聴かれるから語る、迎え入れられるから応える、という物語生成の「場」があつてはじめて、平助の自己言及の物語行為は成立するのだ。

「義右衛門が悪いのだ、彼奴の女房が又悪い奴で、其娘のお鉄と言ふ女が一番悪い奴で、（中略）それから未だ悪い奴が四五人ある。其奴を殺して仕まはなけれア如何しても意恨が晴れねえ。これ、此通り何処へ行くのでもチャンと出刃包丁は放しツ子なしさ。いつでも間に合うやうに持つて居やす。斯う言ふとお前さん、此平助と言ふ男子は恐ろしく悪党だと思ひなさうが、いや／＼素からこんな吞太郎ではありはしない。氣違でもなかつた、馬鹿でもなかつた、村で評判の孝行息子で、正直者で、又利口だと皆んなほめましたよ。」

ここには、勇ましく荒々しい「自然児」にふさわしい語気に混じって、見ず知らずの聴き手を意識したであろう「です・ます調」の言葉が混じる混乱ぶりが見て取れる。彼はいま、自分について物語ることが不安でならないのだ。おそらくそれは、自分にとって意味のあることが、聴き手にとっても意味のあることなのかどうか、それがうまく伝わっているかどうか、理解されているかどうか、といった不安である。この、自分について語ることに伴う戸惑い、そして恥じらいは、のちに制度化される一人称小説や私小説には決してみられないものである。ただし、この不安定さや脆さこそが逆に、けがれのなさや純真さを創出し、「事実らしき」を演出しているという側面も見逃してはならない。

ともあれ、この不安定な語りから、まったくの他者に対して、言葉をもって、「放火・殺人を行うほどにまでなつた自己」を首尾一貫した物語に仕立てることの困難をなんとか乗り越えようとしている平助の必死な姿が読み取れるはずである。おそらく、この自然児「平助」にとって、自分の語る物語がこのようなかたちで「聴かれる」記憶・記録される「体験は初めてであった。しかも、事態をより困難にしているのは、聴き手が、決して強い絆で結ばれた人間ではなく、初対面のいかにも怪しげな人物であり、しかし、そうであるにもかかわらず、平助の境遇を平助固有の境遇として聞き入れようとする態度を持つ両義的な人物であるという設定である。この聴き手との微妙な隔たりを、平助は自らの物語で乗り越えなくてはならないのだ。ことによつたら、物語が形づくつた自己同一性が聴き手によつて棄却されるかもしれないという危険も抱えている。であるから「独言」のときとは違い、彼は話の途中で聴き手の反応をいちいち確認しないわけにはいかないのだ。

「聴かッせい、其上に、大坂から兵役を済まして帰つて来た治右衛門とね、お鉄は、お前さん、夫婦に成つちまやアがつて、婚礼の席へ高間村の者と葛城村の者とを残らず呼んだぢやアありませんか。其席へ此平助が、行かれやせうか、行かれやすまいか、え、え、お前さんなら如何^{どう}仕ます。指を嚙^{くは}へて行かれやせうか」

「道理だ……」

「道理でせう、道理でせう、私^{わたし}は行かなかつた。其時だ酒を呑んで前後知らずに寝て仕まつたのは、如何です、酒を飲んだが悪いか……お前さん如何思ふ」

「私も其様な場合があつた……」

「十人斬」というテキストにおける「自己語り」の方法とは、平助の自己言及の物語が「聞き書き」によるもの、すなわち「音声」によつてなされていることとさらの強調だったと言ひ換えることもできるだろう。言うまでもなく、音声であることを装つた書記言語は、書かれたものとしてある書記言語に対し、偽りなきナマの「肉声」であることを印象づける。そして、このことが、〈事実らしき〉を保証したであろうことは容易に想像がつく。しかし、この〈事実らしい〉物語は、発話者にとって〈事実らしい〉ものになり得たのだろうか。

三 自己語りという困難

ここで「十人斬」が採用した、聴き手の相槌を必要とする「音声」であることを基調とした自己語りという方法について考えてみよう。

W・J・オングは、「声の文化」に生きる人が記憶をもとに長い分析的な言語表現を行うためには「話の手が、ほとんど必須である」と述べている。なぜなら「たてつづけに何時間もひとりごとを言いつづけるのは

むずかしいからである」。「声の文化においては、長く続く思考は、「つねに」人とのコミュニケーションと結びついている」。したがって、記憶に基づいて自分自身について他者に語るということは、記憶しやすく、思いだしやすい型にはまっている思考をたぐり寄せ、それを、理解されやすい型に基づいた統語によって表現することになる。ここでいう「型」とは、オングや川田順造^{（一五）}の例示する、韻律による均整・紋切型のテーマ・反復や対句・決まり文句・慣用表現などである。これらは「なされうる思考の種類を決定し、経験を頭のなかで整理するしかたを決定」してしまう。したがってここに、次のような問題が生じることになるだろう。すなわちそれは、「自己についての物語」といえども、それが発話者から遠く隔たつてしまい、かならずしも本人にとって納得のゆく物語に落ち着くとは限らない、という問題である。

口承による自己言及の物語行為は、記述された自己言及の物語行為と区別される必要がある。同時代の〈自己表象〉は、この見地に立ち返つてから改めて考察されるべきであろう。たとえば、森鷗外「舞姫」（一八九〇「明治三二年一月、「国民之友」の一人称語りが「今宵はあたりに人も無し、房奴の来て電気線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む」と、他者から隔絶された場で記述されていたことと、尾崎紅葉『二人比丘尼色懺悔』（一八八九「明治三二年四月、吉岡書籍店」における「色懺悔」が、作中人物相互の働きかけや相槌があつてはじめてなされたものであつたことは、同時代の対照的な自己言及の方法として分析されるべきで、今後の課題である。いうまでもなく「十人斬」は後者の文脈の中に位置づけられる。ともあれ、「十人斬」の分析において、平助の自己言及を「語り手と聴き手との場における共犯・緊張関係としての音声・パフォーマンス^{（一六）}」として捉え直す視点は重要である。なぜなら、平助の最大の悲劇とは、まさに、聴き手によつて促され、また、受け容れられることによつて過去に括られてゆく物語化された体験と、現に自分の心身に刻み込まれている傷痕が等価になりえなかつたということ、すなわち、自己言及の物語からの自己疎外に起因するものだったからである。

平助の〈自己語り〉のうち、もつとも結末に近い一節を見てみよう。

其日稼ぎの日傭に行つて、幾個か儲けて来る、帰途にむら／＼として又酒だ。家へ帰つて呵られる、飛出して、又酒だ。

あゝ悪い、一人の親を飢へさして、あゝ悪い、悪い／＼と思ひながら家へ帰る、呵られる、呵られる言葉は一々道理で、それを聴くと身で身を責めて溜らなくなつて飛出し、此苦しみを忘れやうとして又酒だ。

抑もこんなに墮落した元の起因はと言ふと義右衛門一家、悪い／＼と思ひつゞけて三度ばかり火を付けて遣つた。

「三度ばかり火を付け」たという結果を、常に「元の起因^{（一七）}」との緊密な因果関係のうちに説明しようとする平助の物語は、それ相応の秩序と説得力をもつて平助の自己同一性を形作っているように思われる。そしてそれは、先ほど見たように「旅の者」がときおり発する「道理だ^{（一八）}」という相槌をもつて迎え入れられてもいる。しかし、にもかかわらず、右の引用に続く彼の物語は次のように締めく／＼られるのだった。

此上は此腰に刺して居る出歯包丁で片ツ端から斬殺して遣る丁簡……
とわざ／＼腰より包丁を取出して旅人に見せる。

「旅の者」が「話してハ呉れまいか」と懇願したのは、平助の境遇についての関心があつたのと同時に、平

助自身に、物語ることによる自己治癒効果を期待してのことだったと考えられよう。しかし、平助にとって、過去とは物語ることによって鎮静化できるようなものでは決してなかった。平助はまだ《物語》に手なずけられてはいなかったのである。彼が突き当たったのは、言語というもののどうしようもない不自由さであったはずである。よって、彼の《物語》は完結しない。

物語ることによって過去に括られ、他者によって記憶されてゆく体験と、現に自分の体内に生々しく染み込んでいる過去の痕跡が決して等価でないこと、そこから不可避的に生じる剰余、それが「腰より包丁を取出して旅人に見せる」という《物語》からの逸脱行為となつて現れたのではなかったろうか。結局、物語ることによって平助が発見したものは《物語》に反発・格闘しつつ肉体を取り戻そうとするおのれの身体であった。このあと平助は「旅の者」の前から姿を消し、いよいよ「十人斬」を果たすことになる。

それでは、一方の、聴き手である「旅の者」の反応はどうだったか。彼は憤然として叫ぶ。

「過まつて居るく、お前の精神は狂ふて居る……義右衛門其他の人々も決して好いとハ言はれない、お前が憤懣して斬殺すと言ふのも無理ではない。けれども考へて御覧、他人の罪を自分で司らふと務めるのは間違ふて居る。自然に委せて置くが好いのだ、自然々々、私の罪を我責むべし、決して他人の罪を司る事ハ好く無い」

「旅の者」は《物語》の空々しさを拒否した平助とは対照的に、あくまでも平助の身体を《物語》という理性に従属させようとしている。いや、それ以前に彼は、平助が感じているような言語の不自由さなど露ほども感じていないのだ。「他人の罪を自分で司らふと務めるのは間違ふて居る」となだめる「旅の者」だが、《物語》への違和感の中に自己のあるべき姿を自覚した平助に「自然に委せて置くが好いのだ」という論理など通じるはずがない。いま、包丁を握りしめていること、この実感こそがいまの彼にとつての自然にほかならないからだ。「何んだか分らない、お前さんの言ふ事は少しも分らない。(中略)如何で一度は死ぬる身体だ、十人は如何しても殺さねばならぬ」、と彼はあくまで「身体」に柔順であろうとする。結局、平助の《自己語り》の物語は、話し手・聴き手の双方に「納得できない物語」になつてしまつたのである。

平助から一人称の物語を引き出すことに成功した「旅の者」だったが、結局、その役回りは「自然に委し給へ」という《物語》の敗北を露呈させたに過ぎなかった。その意味で、この「旅の者」が作品の最後に「詩人」という身分を明かしたことが注目される。すなわち、このエピソードは、平助のような「自然児」が《自らについて物語る》という困難きわまりない事態を「詩人」といへども統御できないのだということを証明してはいないだろうか。そうであるならば、彼のような「自然児」を《物語》の論理にしたがつて作品内で意味付けし完結させるには、他の方法によるアプローチがどうしても必要になるはずである。

四 『重右衛門の最後』の方法

周知のように、『重右衛門の最後』には「なにがしといふ男」(のちに「富山」なる名が明らかにになる。以下「男」と略す)という実体化された語り手が存在する。彼の存在によって、過去を一点から物語るための安定したパースペクティブがもたらされ、また、彼の「経験」が「五六人集つたある席上」で口頭報告されることをもつて、その報告される出来事の《事実らしさ》が保証される、とひとまずはいえよう。実体化された語り手であるから、おのずから、取材の時空に限界(直接見聞し得ない領域)があることになるが、しかし、実際のところ、^[7]先行研究で指摘されているように、このテキストには「男」に知覚しえないはずのものが、知覚されたも

のとして叙述され、また、ときには重右衛門の心中思惟までもが語られる。ここでは、この一見、語りの破綻ともとれる叙述がいかにして成立しうるのかという問題を念頭に置きつつ、考察を進めていきたい。

結論を最初にいってしまえば、「十人斬」における「事実らしさ」が、その物語の基調に「聴く／語る」という場を置いていたとすれば、『重右衛門の最後』はそれと全く反対のスタイルを採用していた、ということになる。そのスタイルとは、当事者に「聴くこと」によって物語が生成されるような直接的な関係性を一切拒否するという方法である。

テキストを見てみよう。たとえば、「火事だア、火事だア」という「絶望の叫喚」が聞えた場面。「男」は「何か手助になる事とも思つて」慌てて庭先に跳びだすが、結局「寧ろ足手纏ひにならぬ方が得策と、其儘土蔵の前の明地に引返して、只々その成行を傍観して居た」。

この「傍観」という態度に注目しておきたい。というのも、たとえば「男」が、重右衛門に関する噂話を聞く態度が「聞き流して又少し歩いた」「其前をも行過ぎた」「立留つて聞く」だったように、対象（重右衛門）との隔たりこそが、この「男」のフィールドワークの基本だからである。

『来てるのかね？』

と自分は友の言葉を聞いて、すぐ訊ねた。

『来てるですとも……、奴ア、これが楽みで、この手伝酒を飲むのが半分目的で火をつけるのですア』
暫くすると、

『何だと、この重右衛門が何うしたと……この重右衛門が……』

といふ恐ろしく尖った叫声が、その次の大広間から聞える。

『先生……また酔つたナ』

と友は言つた。

次の間で争ふ声！（九）

引用は、重右衛門の肉声が「男」によつて聞き取られた唯一の場面を記述した、その一部であるが、重右衛門の声は「十人斬」の平助の声とは対照的に、常に隔たりの向こう側から聞えてくるものとして捉えられている。つまり、『重右衛門の最後』における観察⇨情報収集の方法とは、物語構成要素としての当事者の声（自己言及の物語）を徹底的に「あちら側」に排除することと、「男」の〈解釈の全能性〉を保証することであつた。『当事者の声⇨自己言及の物語』の代わりに用いられるのは噂・評判や外見、あるいは推測・憶測であり、これらのイメージの総体として「重右衛門」は形作られることになるだろう。

友の言葉やら、村の評判やらから総合して見ると、この事件の中心に為つて居る重右衛門といふ男は確かに自暴自棄に陥つて居るに相違ないと自分は思つた。けれど何うして渠はその自暴自棄の暗い境に陥つたのであらうか。（中略）かうして故郷の人に反抗して居るといふのは、其処に何か理由が無くてはならぬ。その理由は先天的性質か、それとも又境遇から起つた事か。（七）

一行目の「総合」という言葉、これは「断定」にはかならないわけだが、これを可能にしているのはやはり〈傍観〉という態度であらう。〈傍観〉がもたらす気楽さ・無責任さが「総合」という名の「断定⇨物語」を可能にしているのである。それに加えて、重右衛門の「死」が、この〈物語〉をより一層容易にしているとも

いえる。重右衛門が死んでいるからこそ、「自暴自棄の暗い境」という結末＝結論を基点に、遡及的に「過去」を構成しうるのである。次の引用もこうした特徴を余すところなく現しているので併せて見ておきたい。

一体重右衛門といふ男は負け嫌ひの、横着の、凶々しいところがあつて、そして其上に烈しい／＼熱情を有つて居る。この熱情が旨く用ひられると、中々大した事業をも為るし、人の眼を驚かす程の偉業をも建てる事が出来るのだけれど、惜しい事には、この男にはこれを行ふ力が欠けて居る。先天的に欠けて居る。この男には『自分は不具者、自分は普通の人間と肩を並べることが出来ぬ不具もの』という考が、小児のことども中からその頭脳に浸み込んで居て、何かすぐれた事でも為ようと思ふと、直ぐその悲しむべき考が脳を衝いて上つて来る。(八)

やはり、直接的な見聞も噂話も空想や推測も、その信憑性のレッテルをいちど剥がされ、すべてを等価な情報としたうえで取捨選択され、この上で「イメージとしての重右衛門」ともいうべきものが編成されていることが分かる。ところで、こうした叙述の方法は、「河内の十人斬」をめぐる新聞記事のそれにきわめてよく似てはいないだろうか。

殺害の原因は、ほぼ本紙に記載せしも、なお足らざる処あれば補わんに、加害者なる城戸熊太郎は、五、六年前他村より嫁を貰い、夫婦中よく暮せしが、酒呑みの癖あるより、時々隣家に行きては酔後の余り若き女など搦う事少なからず、ついには森本とらの長女ぬいと怪しき中となり、人目を忍びて密会などする内、ぬいは我が家の小さく貧なるを以つて、熊太郎方に行かば宜しからんと、熊太郎に確としたる女房のあるを知りながら、引き取りくれよとたびたび頼みたり。その中熊太郎の女房は、夫の不品行を苦に病んでか、ただしは外の原因によりしてか、発狂するに至りたれば、熊太郎は好き時分なりと女房を里方に返し、ぬいを我が家に引き入れたり。これぞこの十人殺しの起りたる原因にして、ぬいは熊太郎に通ぜざる前より、松永伝次郎の次男虎吉に通じ、熊太郎の妻となりたる後もこれ进行を思い切る事出来ずや、しばしば不身持ちの噂ありたり。

この「大阪毎日新聞」(五月二八日、附録)の記事においても、噂や伝聞が犯人像の構築に効果的に取り込まれていることは一目でわかるだろう。しかし、最大の共通点は、「十人殺しの起りたる原因」が、報告者には知覚できぬはずの「死者の心中思惟」を通して、すなわち、当事者の立場からまことしやかに語られているという点にこそある。

このようなことがいえるだろう。『重右衛門の最後』における心中思惟や会話は、出来事をその発話の現在に立ち返つて再現するために書き写されているというよりも、予定された結末に到る〈物語〉を潤飾するため創造されている。そして、このことは、(新聞記事がそうであつたように)『重右衛門の最後』が、書かれたものにはかならない、という至極当然な事実を気付かせてくれる。いや、正確には、「男」の語りはたしかに「五人集つたある席上」での口頭報告という設定であるが、その本質は「音声」よりもきわめて「書かれたもの」に近いというべきであろう。正岡子規の写生文は、移動・観察しつつ語る主体「余」を仮構することで、病床に横たわっている自らの存在を隠し得たエクリチュールであつたが、これと同じように、『重右衛門の最後』の読者がテキストから「語られた声」を聞き取つていたとすれば、美文調の文語体小説から脱却しようとしていた花袋の口語文体による〈事実らしき〉構築のスタディは、この作品において、ほとんど成功していたとい

えるだろう。

「男」は決して、塩山村での、見たまま・聴いたままを報告しているわけではないし、重右衛門の心中思惟と思われる記述も「重右衛門の心の中の声」を再現したものではない。そして、このようなレトリックによって可能になったものが、重右衛門の「意識の流れ」ともとれる長大な内話文だったのではないだろうか。

親が憎い、己を不具に生み付けた親が憎い。となると、自分の全身には殆ど火焰を帯びた不動尊も畜ならざる、憎悪、怨恨、嫉妬などの徹骨の苦々しい情が、寸時もじつとして居られぬほどに簇つて来て、口惜しくつてく、忌々しくつてく、出来るものならば、この天地を引裂いて、この世の中を闇にして、それで、自分も真逆様にその暗い深い穴の中に落ちて行つたなら、何んなに心地が快いだらうといふやうな浅ましい心が起る。(八)

徹底した重右衛門への隔たりが、逆に、重右衛門への同一化、すなわち心中思惟の代弁を可能にする、という逆説がここにはある。こうした叙述は、たしかに「内的焦点化」という分析概念からは説明不可能であり、その意味で「語りの破綻」とも取られかねない。しかし、これまで見てきたような『重右衛門の最後』が一貫して採用する「男」を介しての他者表象の方法からすれば、何ら不思議はないのではないか。なぜなら、これは「重右衛門の心の中の声」であるかのように偽装された「男」の言葉にほかならないからである。

五 おわりに ―― 三人称文体の獲得 ――

相手の立場を重んじ、親身になって話を聞いてあげるといふ態度。そして、対象から距離をおき、自分の存在を悟れることなく、徹底して傍観者を決め込むという態度。對他者的な倫理の点からいえば前者に理があるのは明白だが、どちらが「自分に納得できる物語」をドラマティックに仕立てることができだろうか、と考えてみれば話は別である。あくまで傍観し、噂の収集や観察を重ねるからこそ、(いい意味で、無責任に)あたかも当事者が思っていること・語っていることであるかのような言葉を作り上げ、それを当事者のしぐさや表情、行動に関連づけ、ひとつながりの物語として編集し語ることができるのである。『重右衛門の最後』が「男」に担わせた役割とはまさにそれだった(この問題は、次の第三章でも詳しく考察する)。彼は、重右衛門から「声」の所有権を剥奪し、噂や伝聞、観察、推測といった〈物語〉からなる、イメージとしての重右衛門を自在に物語る任務を与えられ、それを遂行した。そして一方、それとはまったく対照的だったのが「十人斬」の「旅の者」詩人」の方法だった。彼は平助の物語を尊重したがために「自分の納得できる物語」を貫徹することができなかったのである。

次に引用する部分には、『重右衛門の最後』が採用した「男」を介した情報採集とその報告のスタンスのエッセンスとも呼べるものが表れている。また、この特徴は同時に、新聞報道の文体と『重右衛門の最後』の文体とを差異化する重要な要素でもある。

『何だ撲れ? と。こいつは面白れえだ。この重右衛門を撲るものがあるなら撲つて見ろ!』

と言ふと、ばらばらと人が撲ちに蒐つた様な氣勢が為たので、自分は友の留めるのを振り解いて、急いで次の間の、①少し戸の明いて居る処へ行つて、そつと覗いた。いづれも其方にのみ氣を取られて居るから、自分の其処に行つたのに誰も氣の付く者は無い。(中略)この中老漢、身には殆ど断々になつた白地の浴衣を着、髪を蓬のやうに振乱し、恐しい毛牒を頓着せずに露はして居るが、②これが則ち自分の始めて

見た藤田重右衛門で、その眼を瞞らした赤い顔には、まことに凄じい罪惡と自暴自棄の影が宿つて、其半生の悲惨なる歴史の跡が、一々その陰險な皺の中に織り込まれて居るやうに思はれる。自分は平生誰でも顔の中に其人の生涯が顕れて見えると信じて居る一人で、悲惨な歴史の織り込まれた顔を見る程心を動かす事は無いのであるが、自分はこの重右衛門の顔ほど悲惨極まる顔を見た事は無いとすぐ思つた。(十)

傍線部①、ここで「なにがしといふ男」は戸のすきまから隣室の騒ぎを覗こうとしている。けれども「誰も気の付く者は無い」。つまり、物語に内在した位置を占めながらも誰にも気付かれず、一方的に眺めるだけのまなざしをこの「男」は保持している。さらにいうと、その場所から「そつと覗いた」と書かれているように、「男」は「生きられた空間」として対象を捉えているように振る舞っている。つまりこれは、自分の語ることは実際にあち、で経験したことである、と暗に示すことによつて、この報告の信憑性を確保しようとする方法である。そして、この「男」の位置と態度(事件現場における、いま・ここ)こそが新聞報道の文体との決定的な違いであると思う。ただし、「男」は本当にその場に内在しているのか、という点については留保が必要である。

それに続く傍線部②の「これが則ち自分の始めて見た藤田重右衛門で……」と述べるくだりは、「覗いた」視点からの囁目の光景であるはずだが、明らかにそれは「生きられた空間」から逸脱した内容を述べたものではないだろうか。「その眼を瞞らした赤い顔には(中略)其の半生の悲惨なる歴史の跡が一々その陰險な皺の中に織り込まれて居る」などという解釈は、出来事すべてを俯瞰し抽象化できる距離をおいた場所、すなわち語りⅡ記述の現在からなされたものでしかないからである。

なにより重要なのは、語られている重右衛門の側からすれば、「男」は一切見えない、ということではなかったろうか。つまり、この「男」は「重右衛門」についての叙述にかぎりにおいて、語りの機能の上で実体化されていないに等しいのである。ある山村での藤田重右衛門をめぐる一件を「生きられた空間」として提示しているかのように見える「男」も、またそれを「五六人集つたある席上」から物語る「男」も、重右衛門からは決して見えない、にもかかわらず、いや、だからこそ、こちら側からは自在にあらゆる角度・時制から見渡すことができ、また、自在に解釈し意味付けられるわけだ。あとは「なにがしといふ男」がテキスト内に残している「自分はく見た」「自分はく思つた」などの一人称で語っていることの痕跡さえ消してしまえば、言文一致・無人称の語りによる三人称小説の文体ができ上がることになるだろう。田山花袋における三人称文体の獲得の現場は、いわゆる額縁小説『重右衛門の最後』の額縁の内部に見ることができ。

『重右衛門の最後』が実践した〈事実らしさ〉を物語る方法とはどういうものだったのか。それは、「見る／見られる」ではなく、「見る／見られない」関係を、語りのレベルだけでなく物語世界内のレベルにおいても構築することであった。このことによつて、花袋のテキストは、現場中継を装った口語的なエクリチュールを獲得することになった。そして、これは「蒲団」をはじめとする明治四十年代の花袋の言文一致による三人称小説が必要とした方法でもあつたはずである。文学史では『重右衛門の最後』の客観的な語りと「蒲団」の一人称に寄り添つた語りとの間に断絶を見る向きがあるが、少なくとも、ここでの考察の範囲においては、その差はほとんどなかったといえるのではないか。

このように、田山花袋の画期となる作品であり、また、「前期自然主義」の代表作ともいわれる『重右衛門の最後』が達成した境地とは、これまで文学史で指摘されてきたものとは違う意味での〈傍観〉——傍観すること、外側から描くのではなく、傍観すること、外側からも内側からも描く——がもたらしたものだ。ただし、〈他者の物語〉の抑圧に基づく『重右衛門の最後』的な物語行為は、「十人斬」の平助が垣間見せて

くれたような〈物語の干渉を拒む身体〉の可能性を以後のテキストから封印してしまうことも意味していたはずである。平助という存在は、そして、それを統御できなかった「詩人」は、田山花袋に「満足が出来なかった」と否定されたまま今日に至っている。

〔注〕

- 1 江見水蔭が個人雑誌「小桜緘」を創刊したのは一八九二「明治二五」年一月（発行・江水社。水蔭の支援のもと、若い田山花袋は毎号この雑誌に小説を発表。「小桜緘」五号（一八九三「明治二六」年七月）は、花袋の「小詩人」によって誌面のほとんどがうずめられている。なお、「小桜緘」はこの五号で終刊。花袋の赤塩訪問はその直後ということになる。
- 2 『自然主義文学における虚構の可能性』（一九六八年一〇月、桜楓社）
- 3 山田俊治「明治初期新聞雑報の文体 現実という〈制度〉をめぐって」（一九九〇年三月、「国文学研究」、小・二田誠 二）「実録体小説は小説か 「事実と表現」への試論」（二〇〇二年二月、「日本文学」）などを参考にした。
- 4 『声の文化と文字の文化』（桜井直文ほか訳、一九九一年一〇月、藤原書店）
- 5 『口頭伝承論』（二〇〇一年四月、平凡社ライブラリー）
- 6 高木史人「〈口承〉研究といまこゝ」「近代文学」としての「口承」文芸」（二〇〇一年一月、「日本近代文学」）
- 7 たとえば、川上美那子「自然主義小説の表現構造 田山花袋・重右衛門の最後」から「生」へ」（一九八九年三月、「人文学報」）は、「時には重右衛門を対象化しつつも、彼の内面に自由に出入してその心情を描く」ような叙述について、「語り手が見聞し得ぬはずの重右衛門の状態」を描く「飛躍」があると述べている。
- 8 この「解釈の全能性」は、高橋敏夫のいう「パノラマ的まなざし」の「特権性」（「パノラマの帝国 『重右衛門の最後』 論への序」、一九九〇年三月、「国文学研究」、藤森清のいう「転倒した文化的植民地主義の力」（「重右衛門の最後」とエ キンティシズム」、一九九六年三月、「花袋研究学会々誌」）などにつながる性質のものである。
- 9 野口武彦「近代「地の文」の成立 一葉亭四迷の小説作法」（一九八四年二月、「海燕」）を参考にした。
- 10 これに伴う障壁や困難については生方智子「心理を描写する 『蒲団』における観察の技法」（二〇〇一年三月、「成城国文学」）を参照。

〔補注〕

江見水蔭は、『自己中心明治文壇史』の中で、「その頃騒がれた河内の十人斬」と述べていたが、その「騒ぎ」とはいったいどんなものだったのだろうか。この「騒ぎ」は読者側の現実認識にかかわる問題でもあるので、ここで考察しておきたいと思う。

「河内の十人斬」についての報道がほぼ毎日、「大阪毎日新聞」紙上を賑わしたということはずでに述べたとおりだが、報道五日目（六月一日）の紙面（附録）には、この事件が早くも「にわか」として上演されたことが伝えられている。

●十人殺しの二輪加 にわか 例の榮樂軒（淡路町の二輪加）にては本社が雑報に記載したる赤阪村十人殺しを歌蝶の一座にて二輪加に脚色み本日より興行すると云ふ

六月一日といえは、先に取り上げた「更に今また確実にてしかも新奇の事実を探り得たれば、左に掲ぐべし」

という追加記事が載った日だから、また事件の真相はまったく曖昧なままであったはずである。また、この後も連日のように「事変」が伝えられていたわけだから、この「脚色」がどんなものであったのか、たいへん興味深い。

四日後の六月五日、大阪毎日新しい新聞小説の予告を載せる。卅字樓柳水の「十人斬恨の刃」である。ただしこれは江戸末期の惨殺事件に取材した、いわゆる実録体小説である。だがしかし、この小説が赤坂村の事件に即座に対応して書かれたものであることは、連載のタイミグとタイトルから推しても明らかである。ちなみに、この小説は、同月二十六日に同名の単行本として大阪の駿々堂本店から刊行されている。^{補1}

実録物と駿々堂本店という組み合わせでいえば、河内の十人斬そのものに取材した前野芳造『残害事件河内十人斬』という実録体小説が、その印刷・刊行の早さにおいて特に注目される。奥付によれば、この本の発行日は六月一三日、印刷日は六月九日であるが、この六月九日というのは、事件のわずか一三日後、犯人二人が自殺体で発見されたなんと翌日のことである（驚くべきことに、この日に新聞報道された自殺という結末まで、この本の中できちんと語られている）。ただし、いま記した情報は、早稲田大学中央図書館の柳田泉文庫所蔵本によるものだが、国会図書館所蔵本は、印刷日が六月一二日、発行日が六月一六日に訂正されているから、実際はこの日に刊行されたのだろう。^{補2}しかしそれにしても、活版・口絵付・本文八一ページの本がこれほど迅速に刊行されたことは確かであり、そこに、この事件への世間の関心の大きさを讀んだとしても間違いないだろう。

なお、この事件に関しては、次のような実録体小説の刊行が確認できている（いずれも国会図書館所蔵本で確認）。

- ① 前野芳造『残害事件河内十人斬』（六月一二日印刷、六月一六日発行、著作兼発行者・前野芳造、発売所・駿々堂本店）
- ② 檜崎隆存（狂花道人）『熊太郎弥五郎河内の国十人斬』（六月二六日印刷、六月三〇日発行、発行者・森才二郎）
- ③ 月心『河内国十人切早露恨の刃』（七月一三日印刷、七月二〇日発行、著者兼発行者・熊谷政太郎）
- ④ 不染道人『河内の竹藪刃の稲妻』（八月七日印刷、八月一六日発行、著作兼発行者・平松伊兵衛）

これらについてはまだまだ調査・検討が必要だが、^{補3}現在のところ分かっている書誌的な事項のみここに記しておく。

②の「前半」の印刷者が大阪市西区の村瀬時であり、これが①の印刷者と同一人物ということ（発行地は、①②とも大阪である）。一方、③の印刷者は名古屋市の吉田源次郎で、これは④の印刷者と同一であるのだが、双方をよく見てみると、この③と④は本文の版面が基本的に同一で、明らかに異なるのが「序」と奥付のみであることから、これらはいわゆる「重板」であることが判る（発行地は、③が岐阜県恵那郡、④が愛知県丹羽郡である）。③は版權登録をしていないため、当時の版權条例に基づいて、同じ印刷者が重板を他の土地で発行したようである。なお、①②は、ともに版權登録をしているので、原則的には重板（偽版）は存在しないはずである。

また、国会図書館には、演劇脚本『河内水分拾人斬』が「発端から大詰まで六幕」のものの（⑤）と、「四幕目」のみのもの（⑥）と二種類所蔵されており、これらは活字の大きさ・組み方からしてまったく異なるため、明らかな異本であると判断できる。ちなみに、⑤は六月二二日印刷、六月二七日発行、⑥は七月五日印刷、七月一三日発行であり、著作者・松本弥三郎、発行者・梅原忠藏、印刷者・前野茂久次というのは共通している

（発行地は大阪）。また、同じく大阪で刊行された『浪花座すじがき河内音頭恨白鞘』（著作者・勝歌女助（和田正孝）、発行者・川口政吉、印刷者・大垣弥太郎）は、六月二四日印刷、六月二八日発行のものである（⑦）。なお、この事件が歌舞伎の演目としてたびたび用いられたことは、次のように、ある程度まで確認することができる。

『近代歌舞伎年表 大阪篇』^{〔補5〕}によれば、「河内の十人斬」がはじめて上演されたのは、六月二二日初日の切狂言「残害事件河内十人斬」である。当時、大阪の劇場のうち最大規模の浪花座での興行である（題名は、先の①と同じであるが、劇場と目付からはむしろ⑦との関係が想定される）。続いて、七月一日からは弁天座で「十人斬河内奇談」が二三日まで、朝日座で「河内水分拾人斬」が一九日まで上演された。この「河内水分拾人斬」は六幕だったから、先の⑤の脚本がここに用いられたものと推測される。以下、年内の興行は、「河内十人伐後日譚」（浪花座、七月一四日）、「大阪毎日新聞河内音頭恨白鞘」^{〔じうにんきり〕}（中劇場、七月一六日～八月四日、⑦と題名同じ）、「十人斬後日物語」^{〔補6〕}（天昇座、八月吉日）となっている。

大阪以外ではどうだったのだろう。京都では、七月八日から壮士芝居「河内十人斬」（南座）がもつとも早く、次いで、「河内の十人斬」（旭座、八月一日）、「十人斬」（中竹座、八月一日）、「河内十人斬」（常磐座、八月十日頃）、「河内十人斬の後日」（常磐座、八月中旬）と立て続けに上演されている。なお、伊原敏郎『歌舞伎年表』（一九六二年三月、岩波書店）を見る限りでは、江見水蔭「十人斬」の執筆前の東京で「河内の十人斬」が上演された記録は見つからない（『東京日日新聞』においては、五月三〇日、六月一日、八月、一〇日、一三日と続けてこの事件が大きく報道されている）。

なお、大阪の「河内水分拾人斬」（朝日座）と京都の「河内十人斬」（常磐座）は、中村時蔵を城戸熊太郎に配した同じ一座。同様に、「河内十人伐後日譚」（大阪・浪花座）と「河内十人斬の後日」（京都・常磐座）はともに鶴屋団十郎一座によって演じられている。

さて、これらの限られた情報から推測できることは、この「河内の十人斬」という事件が、多様なメディアを通じて伝播していたということである。つまり、これこそが江見水蔭のいう「騒ぎ」にほかならなかったわけだ。今日的な常識からすると、事件に関する報道は新聞・雑誌といったメディアを通して〈事実〉として伝えられると考えがちだが、少なくともこの事件に関しては、実録体小説やにわか、歌舞伎など、事実性の信頼度が相対的に高いとは思われないメディアによっても、さほど大きな時間差もなく伝えられていたことが分かる。識字率や新聞の販売網などを考慮に入れば、かなりの部分の人々が新聞以外のメディアを通して、この事件についての物語化された情報を得ていたのだろう。これらのことは、情報の受け手が欲していたものが、必ずしも速報性と客観性を兼ね揃えた〈事実〉だったのではなく、むしろ〈物語〉そのものであったことを雄弁に物語っている。この時期、通信速度や移送手段の高速化、全国紙の展開などによって、情報の一元化・均質化が次第に進んでいたことは確かだが、「河内の十人斬」報道に見られる〈事実〉の質の多様性と、情報伝達の非同時性、地域間の時間的・質的な偏差などが以上のようなかたちで存在していたこともまた事実であった。

捕1 一八九三「明治二六」年六月二二日印刷、同二六日発行。定価一〇銭。編集発行人大淵渉。

捕2 出版法（一八九三「明治二六」年四月公布）に、「第三条 文書图画ヲ出版スルトキハ発行ノ日ヨリ到達スヘキ日数ヲ除キ三日前ニ製本ニ部ヲ添ヘ内務省ニ届出ヘシ」とある。

捕3 特に『残害事件河内十人斬』は、新聞報道を用いながら日ごとに書き継がれていたものらしく、犯人の自害という結末を見据えぬままに書き始められ、にもかかわらず予想もしなかった結末に落着させなくてはならないため、さまざまな照応の混乱が散見され、物語叙述という点でたいへん興味深い。同じ事件に材をとった町田康『告白』（二〇

○五年三月、中央公論新社）までに至るヴァリアントごとの差異も含め、今後の検討課題としたい。

捕4 一八八七「明治二〇」年二月布告。「第一条 凡ソ文書図書ヲ出版シテ其利益ヲ専有スル權ヲ版權ト云ヒ版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ其文書図書ヲ翻刻スルヲ偽版ト云フ」「第四条 官庁ニ於テ文書図書ヲ出版シ版權ノ登録ヲ得ント欲スルトキハ其由ヲ内務省ニ通知スヘシ」「第五条 版權登録ノ文書図書ニハ其保護年限間ハ版權所有ノ四字ヲ記載スヘシ其記載セサル者ハ登録ノ効ヲ失フモノトス」

捕5 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇』第2巻（一九八七年三月、八木書店）

捕6 国立劇場調査養成部芸能調査室近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 京都篇』第2巻（一九九六年三月、八木書店）